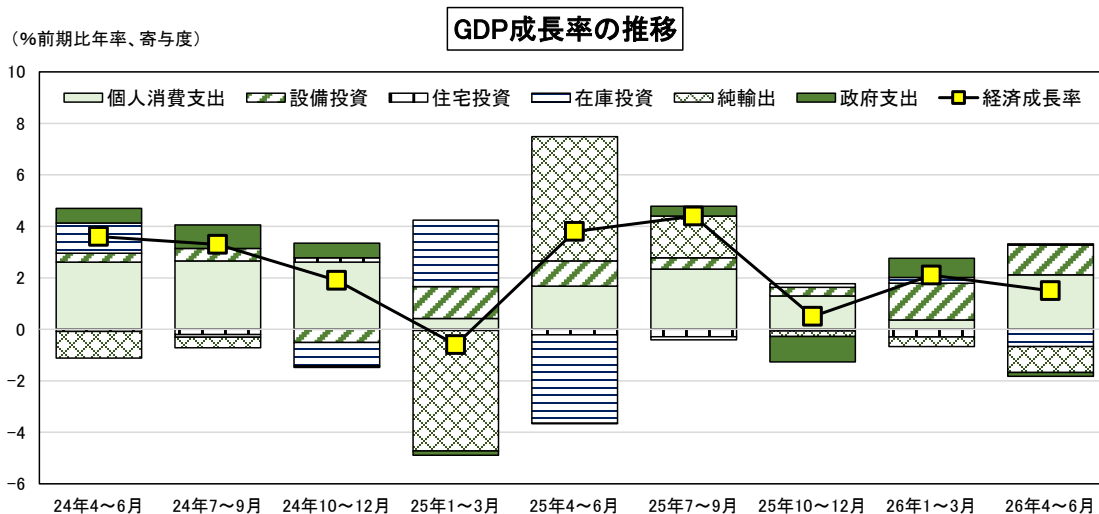


(米国)AI ブーム継続の4～6月期 GDP、金利据え置きの7月 FOMC

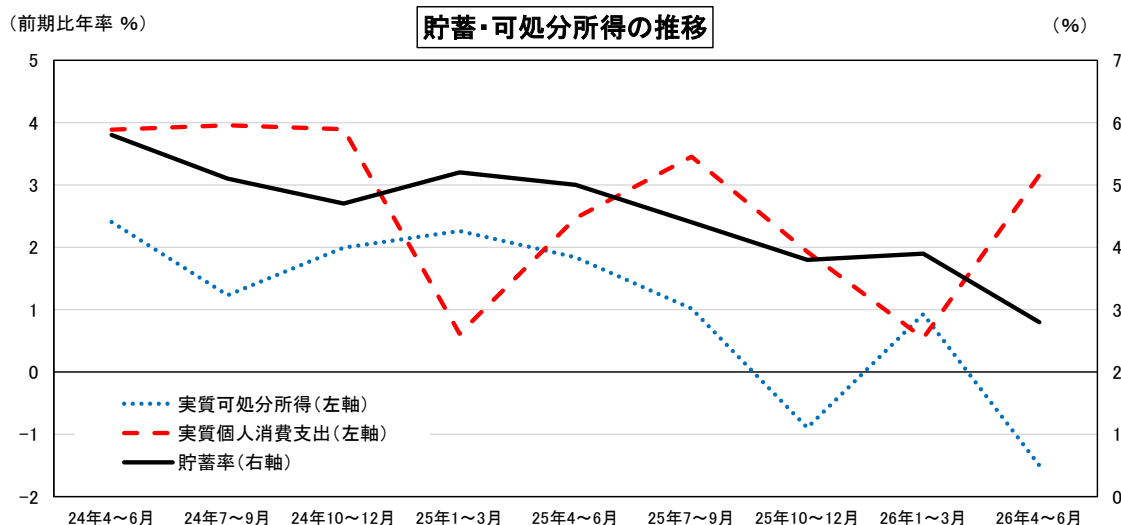
7月30日に公表された4～6月期 GDP(速報)成長率は、前期比年率1.5%と1～3月期の同2.1%から小幅に減速した。需要項目別では、個人消費支出が同3.2%、設備投資が同8.4%、住宅投資が同1.5%、輸出が同4.5%、輸入が同11.5%、政府支出が同▲0.8%となった。



(資料)米経済分析局、LSEG

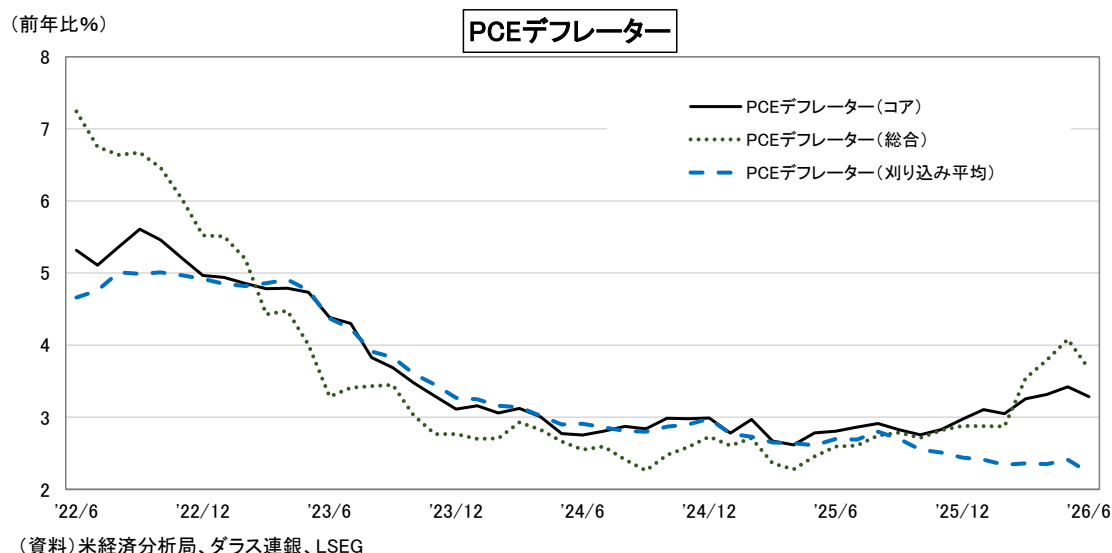
4～6月期 GDP は、個人消費と設備投資が堅調に推移したことがうかがえる内容となったものの、実質可処分所得はマイナス成長となった。また、貯蓄率は低下した。個人消費を支えている要素は所得ではなく資産といえそうだ。

全体としては、AI ブームによる好調な設備投資、株高と資産効果による個人消費の拡大という、これまでの動きが継続していると考えられる。



(資料)米経済分析局、LSEG

同日に公表された 6 月の PCE デフレーターを確認すると、総合が前年比 3.7% (前月比▲0.1%)、コアは同 3.3% (同 0.1%) と鈍化し、6 月の CPI や PPI と整合的な動きとなった。ウォーシュ FRB 議長が好むとされる刈り込み平均でみれば低い値となっているものの、物価は FRB が目標とする 2% と比べると高止まりしていると考えるのが妥当だろう。



28～29 日にかけて行われた 7 月 FOMC では、政策金利を 3.50%～3.75% で据え置くことが 9 対 3 で決定された。反対票を投じた FOMC 参加者は、代わりに 25bp の利上げを主張した。

FOMC 後の記者会見では、フォワードガイダンスを行わない方針に従い、政策金利に関するウォーシュ FRB 議長の見解がはっきりとは示されなかった。一方で、マーケットが独自に経済イベントを解釈し、反応している点について、ウォーシュ FRB 議長は安心していると述べた。

現在、5 分野にて作業部会が設置され、FRB の戦略などに関する考察が進んでいる。しかしながら、足元ではインフレ率が高止まりしていることと、ウォーシュ氏が利上げについて明確な見解を示さないことから、作業部会はインフレ率を低く認識する枠組みを提供し、利上げを行わないための言い訳になるのではないかと警戒感も生じつつある。この点については、今後の展開を見守りたい。